

小泉八雲のことども

根本重熙

筆者が、小泉八雲(Lafcadio Hearn)という名を、初めて知ったのは、たしか旧制中学の、4年生の時であった。松江の朝、木の橋(松江大橋)の上を渡る人々の、カランコロンと鳴る、下駄の音の、音楽的な響きや、神道のしきたりに従って、太陽を、おがんでいる人々の姿などの風景を描写した彼の文(訳者は忘れたが)を、国語の教科書で、読んだ時である。その後、学校の修学旅行の途中で、松江で先生の旧宅を訪れ、その家や、北側にある小庭とか、その一隅にある小さな池を見た。案内人の説明によると、『小泉八雲は、この庭や、池を、こよなく愛して、庭下駄をつっかけて、庭に下りて池、そこに生えている蓮、蓮の下に住みついている蛙、さるすべりの木のすべすべした木肌などをながめて、時を過すのが、一つの楽しみであった』と。その説明に耳をかたむけながら、筆者は、その場所に、和服を着て、下駄をはいた白人が、泰然自若?としてすわっている殿様蛙と、まじめな顔で対面している光景を想像して、おかしく思ったり、『やせ蛙、負けるな一茶、ここにあり』を連想したりしていた。案内人は、更にことばを続けて、『彼(小泉八雲)は、ここに蛇がよく出て、蛙を狙うのを見て、大へん心を痛め、自分のぜんから、蛇のために、食物を分け与え、蛙を、土蔵の方へと逃がしてやったりした』と。それを聞いて、筆者は、愕然とした。というのは、西洋の人々は、人間と自然を、対立的に考えている。われわれ日本人が、両者を、一体のものとして捕えているのとは、対照的であると。誰かに聞くか、読むかして、その時まで、まじめにそう信じていた自分の考えが、根底から、揺り動かされたからである。もちろん、いなか育ちの、当時のその歳頃の少年に、どの程度の知的理解があつてのことかは、大いに疑問ではあるけれども。もと英国人、小泉八雲が、屋敷内の小庭や、池や、又は、蛙・蛇といった小動物に対して、それらのものとの一体観から来るらしい、深い愛情をもって接する心と、日本人ごのみの、いわゆる、風月を友とし、雪月花を愛ずる体の心情との間の類似性を感じた時の印象は、甚だ強かった。その旅行での京都の神社仏閣・余部の陸橋・天の橋立・倉敷の大原美術館・岡山の後楽園などについては、ほとんど記憶に残っていない中で、松江での思い出と、八雲がしばしば参拝した出雲大社でのそれだけが、40年以上を経た今日まで、印象に残っていることによっても、松江での驚きが、どんなに鮮烈であったか、明らかであると思う。それやこれやで、先学諸氏の学恩に謝しつつ、卑見を含めながら、小泉八雲について、紹介して見たいと思うのである。

彼八雲は、1850年、ギリシヤの、イオニア諸島のレフカダ(Lefkada)島で、呱呱の声をあげた。Lafcadio という名は、この島にちなんで命名されたもので、Hearn という姓は、アイルラン

ド人である父親の姓である。その父親は、当時、その島に駐屯していたイギリス軍の軍医で、母親は、ギリシャ人である。アイルランド人というのは、ケルト族であって、その特色は激しやすいことであるという。イギリスの詩人 James Kirkup も The Irish are by nature hot-headed and revolutionary in thought and deed. In this respect they are not at all like the moderate British and Japanese. といっている。(Students Now の3ページ、成美堂) このレフカダ島のギリシャ人には、アラビア人やその他の民族の血もまじっていて瞑想的な気質もあるということである。英軍が、この島を立ち去る時、ハーンの父親は、ギリシャ人である妻を伴って、アイルランドへ帰った。ハーンの長男・小泉一雄は、『父・八雲を憶う』の中で、次の様に述べている。『父ラフカディオはまだパトリシオと称した幼時、その不倫の父チャールスのために、はるばるギリシャから来ている実母ローザが罪なくして離別された悲しい恨めしい経験を持った人です。頼む夫から棄てられ、愛しい二人の子から引き離され、メチャメチャに傷ついた心を抱いて、再び帰るまじと誓った故郷南欧ギリシャへ、万里の波濤を越えて帰り行く母親・ローザ……この哀れな母親のためにラフカディオは幾度衷心から同情の涙を絞つたことでしょうか、幾度あの淡い記憶を辿って惨な母親の幽霊を夢みたことでしょうか』と。更に引続いて田部隆次著『小泉八雲』の次の文を引用している『両親の離婚事件は小ラフカディオの柔い心に如何に大きな傷痕を残したであろう。生長した後か、あるいは弟ジェームスの年頃であったら、あるいはその創は浅く小さかったであろうが、ラフカディオに取って最大不幸は、すべて人の頭脳が出来かかるといわれる5・6歳の頃に起ったのであった。天性によりては、稀れに案外無頓着に通過したかも知れない。しかし、チャールス・ハーンとローザ・テツシマとの小説的結婚によって生れた感情の子パトリシオ・ラフカディオ・ハーンに取っては、すべての小児にとって人生の根底となる父母の結合、家庭の関係は、ただちに破壊されて、この世の立脚地はあやしく不安のものとなったのである(中略)』

『ハーン的一生に通ずる、弱者に対する同情、同時に強者に対する反抗の態度は、同じく母に対する同情から、弱い者苛めをするものでないという考えが、深く若いハーンの心に染み込んだからであった。学校にありては、地動説や進化論に迫害を加えたローマ旧教に反抗し、シンシナーティ(筆者注：ハーンの養親となった大叔母を破産させた親戚の人がアメリカにいる友人のところへハーンを送ったので、ハーンはオハイオ州のシンシナーティ市に住んだが、そこで赤貧の中で行商人、電報配達人などをして苦勞をした。)や西印度(筆者注：1887年ハーバー(Harper)書店の雑誌に通信をするために西印度に赴いた)にありては黒人に味方し、ニュー・オルリアンズ(筆者注：1877年ルイジアナ州ニュー・オルリアンズに移り、新聞記者生活をした)にありては、本国政府に領地を売られて、見捨てられたるフランス人に同情し、日本に渡りては条約改正などを叫んでいる日清戦争前の弱き日本の味方となりて『グリムプセス』や『心』を著わすに到った義侠心の動機はここに基づいているのではないか。晩年抱車夫を選ぶときの条件はただ一つあった『あなた、おかみさん可愛がりますか』『はい』『そんなら、よろしい』かよわき婦人小児を愛するほどのものに悪人はない。これはハーンの信仰であった』

(この一文を読むたびに、これこそ田部氏の今日まで書かれたすべての物の中で最も的確な批評であり公明な意見であると、私は感動する次第です。)と。次に田部隆次の『小泉八雲』においては、『ハーンの両親は熱烈な恋愛による結婚であったが言語、風俗、習慣、宗教の相違などに加えて、父に愛人が出来たための離婚である』と一層具体的に述べられている。

ハーンの父はローザと離婚の後、他の婦人と再婚した。そこで、ハーンは、父親の実母の叔母に引き取られて養育された。この大叔母が彼を、ダラムの、ローマ旧教の学校アショー大学(Ushaw College)に入学させた。この学校で遊戯の際に、親しい友が放った縄が命中して不幸にも左眼を失明、右眼も二度半という極度の近視であるために読書や書き物をするには、なみなみならない苦勞をしたと伝えられている。ハーンの妻小泉セツ(このセツという名については、彼女の孫小泉時が、『祖母のセツは、昭和7年の2月、わたしが数えで八歳のとき亡くなりました。その面影は幼な心にいくらか残っておりますが、祖父八雲について祖母が『思い出の記』を書いたのは、それより大分前のことで、そのころのことは直接に見聞きした記憶はありません。ただこれも一昨年(昭和40年)に亡くなりました父一雄から聞き及んだことを書き認めてみようと思います。なほ、祖母の名は、普通は節子と書かれておりますけれども、正式にはセツでございますので、ここではそれに従います』と述べられた一文があるので筆者もそれを用いることにする)の『思い出の記』の中で『ペンを取って書いています時は、眼を紙につけて、えらい勢いでございます。こんな時には呼んでも分りませんし、何があっても少しも他には動きませんでした。あのような神経の鋭い人でありながら、全く無頓着で感じない時があるのです』と述べている。

一雄は『父は如何なる場合にも、自分は不具者である。ということをお忘れぬ人でした。この点がまた父を努力家たらしめ大きな諦めを持たしめ慈悲深い人間たらしめたのです。少しでも相手の美点をより多く助長させ、それを喜んで行く人でした』と評している。筆者も、もちろん、一雄の見解に左袒するものであるが、一雄のいう“不具者”ハーンはその不具であることの故に眼に見える世界を越えて、その下に、あるいは陰にある神秘の世界にまで直入して思考しその結果を、彼独特の幻想的な著作群に結晶させて発表し得たこと、および日本人の心の深層に、直参探検し当の日本人自身意識せず、又は見逃し、無視していた日本文化の本質を発見摘出し日本および全世界の前にこれを提示するという輝かしくも有意義な成果をハーンの手にもたらすことになったことをも、理解し相応の評価を与へるべきではなかろうか。

ハーンは1890年(明治23年)4月4日、横浜に第一歩を印することになった。ハーンは来日前Harper社の美術主任記者パットンなる者と知り合いパットンから当時東京文科大学で言語学や、国語学の講師をしていた人チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)訳『古事記』などの書物を借用耽読して、まだ見ぬ懐かしい“神国日本”に寄せる想いを、つのらせていた。そこで、パットンの勧告で、ハーパース・マンズリー(Haper's Monthly)に、記事を送る契約を結んで来日した。

今、ハーン——人生のスタートから打ち続く不運に翻弄されて来た運命の子——はあこがれ

の国日本の玄関に、地球を半周して、辿りついたのである。その日4月4日は快晴であって富士は秀麗な姿を誇り紺青の海の上には無数の純白のかもめが群れ飛び、気温は肌に心地よく、桜の花は綻びはじめていた。彼が夢に見た日本は、彼女の最上の装いをもって、彼を歓迎した。彼はすっかり感激して“I want to die here”と言ったと伝えられている。明治24年6月28日(日曜日)の山陰新聞によれば、『予は百円の月俸を得れども一ヶ月に不足を告ぐる位に費消す。全体予は報酬金は其処にて費消することを本旨と思ふが、中には予が外国の遠きより来りおりながら、不覚悟千万なりとの批評をなすものもある由なれども、予の眼より見れば此世界は決して広きものと思はねば、何れの土地にいるも一向心に異なることなし。骨を埋むる敢て墳墓の地のみならん。今日の世にある学生等は、尤も世界は狭きものの観念を抱き、何れの国を問はず己れの思ふ処に至りて其の志を遂げざるべからずと笑いながら咄したりと。この語、氏が肺腑より出づ。又味ありといふべし云々』とある。これをもって、これを見れば、彼としては、人間たるもの、一度は死ななければならないのなら、よし、この国にきめた。上陸の際、彼の言葉を再確認したのであろう。その覚悟があればこそ、彼のひたむきの努力が可能となり、前人未踏の研究領域に挑戦しその覚悟の通り、その生涯を、この国に閉じ、明治37年9月26日に狭心症のため死去した。時に55才。東京雑司ヶ谷の共同墓地に葬むられた。法名を正覚院浄華八雲居士という。

さて一挙に彼の死去に話が飛んでしまったが、もとにもどって、彼は前述の、ハーバー書店との間にいざこざがあって、怒りの余り自ら同書店との契約を破棄している。セツの記述によると『ハーンが日本に参りましたのは、明治23年の春でございました。ついで間もなく出版会社との関係を、絶ったのですから、遠い外国で頼り少い独りぼっちとなって、一時は随分困ったろうと思われます。出雲の学校へ赴任することになりましたのは、出雲が日本でごく古い国で、いろいろ神代の面影が残っているだろうと考えて辺鄙で不便なのを心につけず、俸給も独り身のことであるから沢山は、要らないから赴任したようでした』とある。

彼が島根県松江市にある松江尋常中学校の英語教師になることを決心して島根県知事と仮契約を結んだその書面に、ラフカヂオ・ヘルンと書いてある為であろう当時の山陰新聞、松江日報にヘルンという呼び名を使用した。従って松江ではヘルンが通り名になっている。セツも説いている様に生活に困っていたので1ヶ月分の前借りをして任地に赴いた。彼の給料は100円であって、彼の前任者タツトルの80円よりも優遇されていた。中学校長より30円も高くハーンの親友で同じく尋常中学校の教頭西田千太郎の月俸は45円、米一升3銭、明治24年当時の八雲旧居の借家賃は3円(室数10、畳数52畳、禄高百石の旧武家屋敷)であり月給35円位ともなると妾宅を構えたものだとのことである。

彼は松江では彼の妻となり文学著作の為の無二の協力者でありその人の中に日本婦道の典型を発見するに至り遂にハーンを日本の宗教、慣習から更に西洋の文化とは異質ではあるが優れたものと認めた日本文化の本質探究へと向わせる機縁となった人小泉セツ(明治元年2月4日生れ、昭和7年2月28日没)との運命的な出会いがある。当時彼女は赤貧の境遇にありその為入婿が逃

げ去った為に明治 23 年 1 月 13 日に離婚しており旅館の女中をしていた。ハーンはその境遇に同情し、やがて物質的な援助を与えるようになり、後に同棲するようになるのである。正式の結婚はハーン夫妻が神戸に赴いてからのことである。

次に、松江における、ハーンの生活の一端を、当時の山陰新聞の記事によって紹介して見よう。この資料は広瀬朝光氏が国会図書館にある、山陰新聞をマイクロ・フィルムに撮影しラフカディオ・ヘルンに関する記事を抜萃されたものである。又当時の新聞記事には句読点・濁点が施されていないので同氏がそれを補い、難しい漢字の読み仮名はそのまま残し変体仮名は普通の仮名字体に改め同氏著『小雲八雲論』におさめられたものの中から筆者が適宜抜粋したものである。注：筆者はこの文の中で小泉八雲・八雲・ハーン等の呼び名を使用して来たが、新聞記事に関しては原文にある通り“ヘルン”の名を使用することにした。又漢字仮名使いも原文のままとした。。

明治 23 年 8 月 6 日（水）

●タツトル教師（筆者注：ヘルンの前任者）の後任 当尋常中学校の外国英語教師は、いよいよ英国人ラフカヂオ・ヘルン氏がタツトル氏の後を引き受くる事と為り、来る 9 月より就職の筈なりと。

明治 23 年 9 月 1 日（月）

●師範学校教師たらん ヘルン氏は一昨日午後 4 時来松、末次本町富田ツチ方へ投宿せり。月俸は多分 65 円なるべしと。（筆者注：100 円。前出参照）

明治 23 年 9 月 3 日（水）

●ヘルン氏 此中来着せる英国人ヘルン氏は、本月より来る 24 年 3 月迄を一期とし、いよいよ当尋常中学校及び尋常師範学校の英語教師に雇ひ入られたり。

明治 23 年 9 月 7 日（日）

●ヘルン氏の視察 今度本県中学に雇ひしヘルン氏は、其著書も数多ある中に東洋に関するものも 12 種ありとか聞きしが、昨今も東洋の風俗奇聞に属する事項を蒐集し居る由にて、頻りに会する人ごとに当国の神社仏閣に関する故事来歴等を究問し、或は説を作して曰く、予が東京より陸路当県に來りしとき、道すがら瞥見する所にては、当県に近づくほど神社の多くして仏閣の減ずるが如き觀ありしは、当国の神国と稱する一證にてもあらんか、又た途中にて盆踊を一見せしに中々面白しなど咄し居れりと。聞く所にては、氏は嘗て 10 年ばかりは某新聞に従事せしこともありしとかにて、或は今尚ほ其通信を担当し居れりとも申せば、他日以上の事柄が氏の筆に上りて数千里の遠きに航することもあらんか、別項飯石郡通信中の神前念仏等が其一ともならば、アマリ有難ありがたきことにもあらず。

明治 23 年 10 月 5 日（日）

●ヘルン氏と荒川重之助氏

当尋常中学校雇外国教師ヘルン氏が記者として詩人として詞藻しうに富めるは吾人の聞知する所なる

が、氏は傍はら美術品鑑識の明をも具ひ顔ぶる之れを探検するに意を注ぎ居る由にて、来松以来は特に神道の事を究めんと志を有するやに聞き及びしが、元来仏教に涉獵せし趣きなるを以て去る28日（日曜日）偶々地藏菩薩或は羅漢の図画、若くば肖像彫刻物を一見せばやと思ひ立ち、日曜日を僥倖に^{さいわい}当市寺町（大小とも）残る限なく歴巡せし中、思いきやフト氏の視線を凝集せしめ遠望近眺、一賞三歎^{しば}屢らく去と能はざらしめたる石像の地藏菩薩あらんとは。氏は^{こころのうち}臆に想るやう。サテも稀代の名作なるかな、それに付もアマリ其年代の経ざりし状より察すれば、或は其作者に見当ることもありもやせんと、頓て^{やが}按内を乞ふて寺僧に面会し^{いちふ}一伍一什を語りしに、其作者は当市横浜の何某なることを知りしが、素と此の安置せる地藏菩薩と云へるは、当市堅町長岡九右衛門（荒物商）氏が其小児の昨年果なく死せしを悼み、小児に縁ある地藏菩薩をば或る石工に刻ましめ、一旦之れを安置せしも意の如くならざるより、更に右横浜の何某に托せしかば、某も^{せつかく}切角の懇望殊に十分勝手に意向を凝しての依頼、何はサテ措き一心不乱に其由緒等を吟味し、思ふがままに刻みし上此処に建立したるものなりと聞いて喜び、氏は直ちに寺僧に紹介を托して予にも是非其彫刻をと依頼し置きたりと、以上発見以来の顛末を知人に^{てんまつ}断せしも、横浜に妙技の石工ありとは誰れ知るものとてなかりしが、氏も亦其姓名を記せざりしと云へり。其後氏は或る者の按内にて偶ま^{たまた}美術家荒川重之助氏の家を訪れしが、折あしく同人の不在なりしも、幸に彫刻せし牛を見て大に喫驚し、アア山陰の僻地果して此の如き美術家あるか、日本美術家多しと雖サテも此の如きものあるかと二たび三たび賞讃し、当日は空しく立ち還りたりしが、氏は翌朝サモ嬉しさうに知人に言らく、昨日こそ予は彼の最とも敬愛すべき美術家の姓名を知り得たりと、得々然として手帳を取り出して曰く此人なりと。知人皆驚き始めて荒川重之助氏なることを知り得たり。氏は是に於て再び荒川氏を訪ひ、彼の前日賞賛せし牛を見、更に故中条氏より依頼せられし偏額を見て、其景色に遠近あるを賞し、実に稀代の妙技なる哉。絵画に遠近を模糊の間に區別するは、世間^{せと}固より其人なきにあらずと雖ども、彫刻に遠近を區別するは有名の技術家も尚ほ室に入る能はず、此の図此の妙を致す。抑々何等の巧手なるぞと嗟賞し、尚ほ語を継ぎ説き出して曰く、草木等に対し奇麗なりとか清酒なりとかの境遇に於て、一般の模様を模写するは西洋決して東洋に劣らじ。去りながら観念を惹き起せし当時の時刻の朝夕、午前及び天気の関係等に於ける光景を写実するに至りては、^{すいす}瑞士に其人あるも尚ほ日本の画家に及ばず。此の事彫刻にあらずと雖も亦以て他を推すに足るべしと。更に地藏菩薩の美妙なることを称して、元来該菩薩は小児と戯れ、小児を馴らすを以て貴ばるものなり。而るに予は是まで無数の地藏菩薩を觀ぜしに、一として意に適せしものなし。万体一抛所謂和尚の像に似たり。豈に其本旨に背くの太甚しきものにあらずや。今彼の像を見るに、如何にも小児をして馴れ近づかしむるに足るものあり。是れ予の愛慕^{おほ}措く能はざる所以なり云々と、荒川氏の見所も一に符節を合するが如しとかや。一は学術的より観察し、一は技術的より実験し、而して其觀る所異ならざるは双美と謂べし。氏は一昨日荒川氏を其の寓に招ねき懇談刻を移し、^{とも}与に手を別つを惜みしほどなりと。当時も知事所蔵荒川氏の作に係る^{やぶつ}箭筒等を品評して大に望みを属せしとか。而して彼の地藏尊は寺町龍昌寺に在り。

明治 23 年 10 月 16 日 (木)

●荒川氏米シカゴ府大博覧会の出品

本尋常中学校雇外国教師ヘルン氏と当市横浜の美術家荒川重之助氏とは、一見傾蓋旧知の如き状あることは先頃の紙上にも掲載せしが、荒川氏は来る 26 日米国シカゴ府に開設する万国大博覧会へ得意の彫刻物を出品せんとて目下考案中の由にて、其の図書彩色等の事に付き、右ヘルン氏と何か協議し居る由に聞けり。嗚呼我親愛なる崇敬すべき美術家畢生の神を磨して、其名を世界の上に彫刻せよ。

この荒川という人について、セツは『思い出の記』に次のように述べている。『松江にいました頃、或るお寺へ散歩いたしまして、ここで小さい石地藏を見て、大層気に入りました、これは誰の作かと寺で尋ねますと、荒川と申す人の作ということが分かりました。この人は評判の変人でございましたが、腕は大層確かであったそうです。学問のない、慾のない、いつも貧乏をしていながら、物を頼まれても二年も三年もかかっても、こしらえてくれない老人でございました。ヘルンは面白いというので、大きい酒樽を三度まで進物にいたしました。それから宅に呼びまして御馳走をしたり、自分でその汚ない家を訪ねて話などいたしました。彫刻を頼んで、そんなに要らないというのを沢山にやりました。しかし、宅にございますあの天智天皇の置物は、荒川の作にしては出来のよい方ではないが、ヘルンの申しました『この貧しい天才』を尊敬して買ったのでございます。』と。

明治 34 年 1 月 1 日 (火)

神都松江

さくら訳

(ラフカヂオ・ヘルン氏「日本警見記」の一節) 小引

伊太利のマルコ・ポロという人が、其の航海記の中に、支那の東方にあって、ジバン(即ち日本)という極楽郷があって其の国では、屋根でも天井でも悉く黄金で張りつめてあるなど、大きな法螺を吹いて、始めて我日本を世界へ紹介してから以来、我邦の事情を叙述し批評した外人の著書は甚だ夥しいもので、之を集めたならば、まさしく一個の立派な文庫が出来やうという程である。だが、真誠に我邦に同情を表し、我々大和民族の思想、感情を熟知し、其心靈界の事にまで立ち入って論述し、吾人をして拍案三嘆、其の慧眼な観察と、精確な批評とに感激せしむる者は誠に五本の指を屈するに足りない程である。今の帝国東京大学文科大学の講師で、曾って我が松江の中学に教鞭を執ったことのあるラフカヂオ・ヘルン氏の如きは、此の極めて少数な記者の中でも、^{けだ}蓋し其の首位を占むる人であるといっても差支なからう。日本人は^{さんじ}蕞爾たる極東の一小国民で、思想もなく感情もなく、姪逸な、未開な一島国民で、心靈上どこさら特色のない一人種であるとは、従来欧米人の一般に誤解して居た所である。此の誤解を打破して、日本国民の真面目を天下に紹介したのは、実にヘルン氏其の人で、我国人たるものは、此の異点^{むか}に対して大に氏に感謝を捧げなければならない。

氏は凡^{すべて}に於て日本風である、日本^{びいき}鼻負である。其の書齋には、椅子、テーブルの代りに、瀟酒

なる紫檀の机が置いてあって、火鉢の傍には、長羅^{らう}字の煙管5・6本を備へ、坐蒲団の上に端坐せる氏は、交^{こいごも}其の煙管の一を執って、国分や長崎の煙を吹いて欣然として居る。其の坐臥進退の如きも、行儀のわるい日本人には到底真似の出来ない程である。氏の夫人は松江の人で、氏が現今日本へ帰化して島根県土族小泉八雲と称して居られるのは、実に其の夫人の姓を冒したのである。

氏は何れの点から観るも詩人である。其の作品の多くは、形を散文に籍^かりて居るけれども、極めて叙情詩的の趣味に富み、優に叙情詩人たる熱情を認むることが出来る。帝国主義を宣揚して最も能く此の世紀の時代的意思を捉へ得たりと称せらるるキップリングに比せんよりは、寧ろ『ペリード・ライフ』に人心の秘奥を歌ひしマシウ・アーノルドの亜流と云ふを得べきものであらう。其の日本の事に関する著書には、Glimpses of Unfamiliar Japan (1894年の出版で、西田千太郎の記念のために著はされたものである)、Out of the East (1895年)、Kokoro (1896年)、Gleanings From Buddha Fields(1898年)等で其の他 In Gostly Japan, Ather Volume on Japan in Shadowing 等があるそうだけれども、予は未だ一覽の榮を得ない、以上に挙げた中で、最も雲州地方の事の多く書いてあるのは、Glimpses of Unfamiliar Japan で今爰^{こゝ}に予の翻訳を試みやうとするのは、其の中に収められたる一篇である。

氏の最も私淑せる詩人は、米のナザニエール ホーソーンで、其の文の心理的なる、叙情詩的趣味に富める、酷だしくホーソンに似た所があるのである。

氏の父は愛蘭人で、母は希臘人である。初等教育を仏蘭西に受けて、後久しく北米に留り、遂に某新聞の通信員として本邦へ渡来した。爾来、島根県第一中学校、第五高等学校を歴任して、今や小泉八雲の名を以って、東京の文科大学に講師となっている。始め阿弥陀経の英訳、エマーソン、ホーソンの全集を携えて、孤身飄然長崎に上陸した無名の一記者は、今や米国に於てホーソン以来の大家として承認せられ、帝都牛込の寓居には、珍書万卷、由来交際嫌いの氏をして姿に群籍の間に坐臥せしめている。

身内の者の記述において避けられない身^{ひい}蟲^ま眞^まや遠慮を含まぬ当時の客観的資料である新聞記事の若干を紹介したのである。

彼は甚だ和食を好み、刺身、煮付け、酢の物、焼魚、干魚など、旅館で、注文し、彼の膳は日本料理オンパレードであって、それらを片っ端から平げてから最後に飯を食ったという。ただ、糸こんにやくだけは、『私の国、こんな虫いる。それ思い出す。食べられません』と^{かふと}いって兜をぬいだそうだ。ある時は、魚の吸い物を食べようとして、椀のふたをあけかけて、不思議そうに耳をすましていたがやがて『この中の魚、泣く』と言った。熱い汁を盛った時漆器の椀が立てる音を、そのように聞いたのである。

旅館で、ベッドがないので布団を積み上げて、ハーン式ベッドを作って使ったが、蚊^か張^やに、立ったままで出入りして、宿の人々の、度胆を抜いたこともあるという。

年始廻りには、新調の紋付、羽織、袴、白足袋という、いでたちで、次に下駄をはく段になっ

て、人々の助けを得て、下駄の上に、立ち上ってはみたものの、一步ごとにぬげてしまうので不承不承に、靴にはきかえて、颯爽として、肩で風を切って出かけたものである。後に矢^{のち}絣^{がすり}の和服に靴という恰好の女子学生達が、都大路を、濶歩するようになるのであるが、この流行の創始者はハーンであるといえるかも知れない。

因^{ちなみ}にハーンの家紋は下羽^{さげは}の鷺^{さぎ}で祖先の中に英國は、ノーザン・バランド州、フォードに居城を持っていたサー・ヒュー・ド・ハーンの家紋が「大空に昇らんとする鷺(The heron seeks the heights)」であって彼が松江にいた当時、その地の某画家に頼んで、その鷺を図案化したものであると。一雄が、例の『父・八雲を憶う』の中で述べている。次にセツの『思い出の記』の中で、彼女は述べている「読売新聞であったかと存じます。或る華族様の御隠居で、昔風がお好きで西洋風の大嫌いの方がありました。女中も帯は立て矢の字、髪は椎茸たぼの御殿風でございました。着物も裾長にぞろぞろ引きずって歩くのです。ランプも一切つけませんで源氏行燈です。シャボンも嫌い。新聞も西洋くさいというので、西洋くさいものは奉公人の末に到るまで使わせないのだそうです。

こんな風ですから奉公人も厭がって参りません『あのお屋敷なら真平御免です』と申しますことが記してございました。この話をいたしますと、ヘルンは、『如何に面白い』とって大喜びでした。『しかし私大層好きです。そのような人、私の一番の友達。私見る好きです。その家、私ぜひ見る好きです。私西洋くさくないです』とって大満足です。『あなた西洋くさくないでしょう。しかし、あなたの鼻』などと冗談申しますと『あ、どうしよう。私のこの鼻。しかし、よく考えて下さい。私この小泉八雲、日本人よりも本当の日本を愛するです』などと申しましたと。セツのこの寸鉄人を刺す皮肉はどうだ。彼女は冗談だといっているが、筆者には、きつい皮肉と思えてならない。それに答えたハーンの切りかえしの見事さ。まさに、剣豪同士の、丁丁はっしと切り結んでいる様を見ているようである。筆者はこの件^{くだり}を読んで『奥さんの言い方は、ひどい』と言いたい衝動に駆られた。ハーンの肉体的な特徴は、どんなに西洋くさくても、彼の所^{せい}為^いではないのにそれを言うのは卑怯だと思ったからである冗談にしても質^{たち}がよくないと。ハーンは、きつと言いたかったのであろう『あ、どうしよう。私のこの鼻、しかしよく考えて見て下さい。私この小泉八雲は日本人よりも本当の日本を愛しています。そして日本人よりも本当の日本を深く理解もしています。』と。謙虚な人柄の彼のことであるから、最後の部分は、金輪際言葉にして出さないであろうが。又鼻を手でかくして、あわてふためいて見せたであろうが、誇り高い彼であるから、もちろん鼻のことなどは気に止めなかったに違いない。しかし、この夫婦のやりとりには、第三者が、立ち入ることなど、“野暮^{こつちよう}の骨頂”というものだろう。琴瑟相和しているご二人の間には最初から、ちゃんとした固い了解が成立してただ強い言葉の遊戯を楽しんでいるだけ。なのであろう。剣呑^{けんおん}！ 剣呑！

先に紹介したエピソードは、他人には如何にユーモラスに見えようとも、ハーンご本人にはそれどころではなく全く真剣なものであろう。なにしろ彼は超人的な努力を傾倒して、如何なる困

難をも克服して日本人になり切ってやろうと覚悟しているのである。そうでなければ彼の畢生の悲願とした（と筆者は信ずるのであるが）日本の真の特質を発見するという目的を遂に達することが不可能となるでわないか。筆者は彼のこの様なひたむきの努力を思うときには常に涙腺が弛みはじめるのを感じるのである。

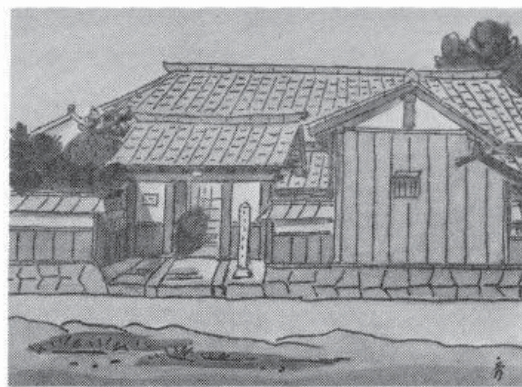
しかし翻って考えればここで涙腺を弛みっぱなしにして置く必要はないであろう彼自身は、筆者が先に用いたような^{かたひじいか}肩肘怒らせた真剣とか悲願とかいふ言葉とは縁遠い境地に悠々自適しているのでわないのか。彼は「之を楽む者」の境涯に遊んでいる巨人（ものの本によると、彼は五尺一寸の短身倭軀の持主であったという）ではないのか。

知之者、不如好之者。好之者、不如楽之者。（論語、雍也篇）

之れを知る者は、之れを好む者に如かず。

之れを好む者は、之れを楽しむ者に如かず。

例の広瀬朝光著『小泉八雲論』の中において氏は『ラフカディオ・ヘルンが、今日、英文学史、日本文学史の両分野において与えられている評価は、あまり高いものとは言い難く、むしろ無視されて居る感じすら受ける。その原因はヘルン自身の経歴、或はその文芸の本質に基因する。彼は英文学の専門的な研究者、即ち学者ではなく、といて小説家でも評論家でもなく、民俗学の研究者でもない。この曖昧模糊とした把み所のないその存在が、所謂文学史の範疇では律し切れない所に、彼の悲劇的な要素《必要以上に低く評価されている》がある。これを裏を返せば、彼の博識を物語るものであり英文学や日本文学に限定することなく、むしろ彼の場合には、文化史や比較文学の分野において研究されるべきである。』という鋭い指摘を、示されている。筆者は上記の、ハーンの評価が高くない原因として“曖昧模糊さ”の外にもう一つ、ハーンの、見解が、余りに時代を先取りしているということを加えたいと思う。その為に、世の中が、彼の言説を正当に評価するには相当長い時間をかす必要があるということである。一例として土方辰三著の本で次のことを教わった。『1896年 KoKoro『心』が出版された時は丁度日清戦争の直後であって、世界の注目が、一斉に極東の、この一小国に集まった時であったので、ハーンのこの書は大へん有名になり、The Conservator という Philadelphia の雑誌が1904年4月に次のような見解を掲げた。「Tolstoy（トルストイ）や Gorky（ゴリキイ）が日本に赴いて、ロシアにも立派な部分が存在していて、これは決して日本と戦争しないでよい部分なのだと説き示すことが出来るのであるが、日本にも、ロシアと決して戦争しないでよい部分があるのである。そして日本とロシアのこの部分こそ戦争が終った後々までも長く生き残るべきものであり、又残さねばならぬものである」と。この様な、すぐれた評論を生ぜしめたハーンの書は永遠の生命



小泉八雲旧邸（中村吉之介画）

を持っているというべきである。』と同氏は評して居られるが、この様に歲月によって風化されない言説を時代に先駆けて吐くことは極めて偉大な人間のみが為し得ることである、今後、世間は、追々と、ハーンの評価を進めて行って彼を正当な標高に位置せしめることであろう。

ハーンの妻セツについて

ハーンについて語ろうとすれば、妻セツに触れないわけにはいかない。彼女は、松江藩士小泉湊の娘であって同家は五百石の家柄で、母方の祖父は出雲の家老であったとのことであるが、明治維新という大変革期に会って、没落してしまった。セツは、学問技芸を一通り修め、新式の高等教育こそ受けていないが、家庭での躰しつけは立派なものであり、本当の意味での教養を身につけていたのである。士族という階級は、当時の上流階級に属していて、エリートであり人間は如何に生きるのが美しいか、どんな死に方が見事であるかという強烈な美の感覚をば考えながら生活している極めて精神主義的な人世を生きていた人々であって借金の證文にも期日までに返却しなければ満座の中で笑われましても結構ですと書く体の処世術の持主であった。ハーンは彼の著書の研究者達に『彼は日本婦人を実際以上に美化し過ぎている』と評されることもあるのは自己の妻であるセツの中に日本婦人の典型を見出したからにはほかならない。この意味で彼は長い不運の生涯を過した後、あこがれの“神国日本”に辿りついた後はその国で彼の理想の伴侶を得て彼の闘志をいやが上にも、かき立てることになったのである。しかし、彼のこの自ら選んだ未知の対象に向っての大胆な挑戦の為の肉体的または精神的な苦痛は、彼には苦痛として自覚されなかったであろう。彼の前には無限の未知の世界が彼の探険を待ち望んで広がって居り、家庭には彼が、憶懐的である日本婦徳の体现者であるセツが同志として存在しているのである幸運の女神が今や彼に向って、やさしい微笑を送りはじめたのである。彼は杵築の大社や日御崎の神社にも詣でた。彼の日本での処女出版『知られざる日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan, 1894年)は出雲を中心とする風俗誌、名勝紀行が大部分を占めているが、その最後の『神国日本』では最も多くのページを日本婦人の礼讃に捧げている一事をもってしてもハーン夫人の人間像を明らかに浮き出させて、余りあるものといえると思う。ハーン夫妻の間柄は極めて円満であり妻セツは彼女の夫の著作にもなみなみならぬ貢献をしているが夫の幸福にも同じく至大の寄与をしていると言はねばならない。

ハーンの三男小泉清が昭和25年5月4日の朝日新聞に『母がわれわれ4人の子供を育てる忙しかたわら、不自由な語学を仲だちとして、父に日本の古い伝説や新聞記事から、色々珍しい話を搜しては読んできかせることを日課としていたことは、今日のいかなる文士の奥さんの内助の功も想像におよばぬ涙ぐましいものがあつたと思う』と書いている。長男一男は前出『父・八雲・



ラフカディオ・ハーンの肖像
(左眼失明のため写真は右側からとられている。)

を憶う』の中で、『父は自分の友人中にはいつも傍に二・三人の助手を置いて仕事をしておられる人が多いが私には彼の如く助手もないしまたあのようなことはとても出来ぬ、しかし私、ママさん貴女があります。』と申して母を唯一の頼みにしていたのは事実です。

「^{わたし}妾が、女子大学でも卒業した学問のある女だったら、もっとお役に立つでしょうのに……」と母が申すと、父はいつも母の手を執って戸棚の傍へ連れて行き、その^{かぶ}襖を開けました。戸棚の中にはガラス張の本箱が一つあってこれには父の著書が金文字の背をズラリと並べているのでした。これを指して『^{こう}斯、誰のお陰で生まれましたの本ですか。学問ある女ならば幽霊の話、お化の話、前世の話、皆馬鹿らしのものといつて^{わら}嘲笑うでしょう』と申して、母が^{おもしろ}面映がるほどに父はその場で母の労を賞揚するのでした。傍にいる私に向ってまでも『この本皆あなたの良きママさんのおかげで生まれましたの本です。なんぼうよきママさん。世界で一番良きママさんです』などと申して真剣に褒めそやすのでした。此の場に他人が一人でもいたらイヤハヤ少からず当てられるところでしょうが、そこは親子水入らずですから平和なものです。』と述懐している。

セツはハーンの著作に対して或る場合には共著者といってもよいぐらいの位置をしめているが彼女の『思い出の記』の中からその干与ぶりについて少し長いが抜粋して見よう『著述に熱心に耽っている時、よくありもしないものを見たり、聞いたりいたしますので、私は心配の余り、余り熱心になり過ぎぬよう、もう少し考えぬようにしてくれるとよいが、とよく思いました。松江の頃にはまだ年は若いし、ヘルンは気が違うのではないかと心配いたしまして、或る日西田さん（著者注：ハーンの親友であった）に尋ねたことがございました。余り深く熱心になり過ぎるからであるということが次第に分って参りました。

怪談は大層好きでありまして『怪談の書物は私の宝です』とっていました。私は古本屋をそれからそれへと大分探しました。淋しそうな夜、ランプの心を下げて怪談をいたしました。ヘルンは私に物を聞くにも、その時には殊に声を低くして息を殺して恐ろしそうにして、私の話を聞いているのです。その聞いている風がまた如何にも恐ろしくてならぬ様子ですから、自然と私の話にも力がこもるのです。その頃私の家は化物屋敷のようでした。私は折々、恐ろしい夢を見てうなされ始めました。このことを話しますと『それでは当分休みましょう』と申して、休みました。気に入った話があると、その喜びは一方ではございませんでした。

私が昔話をヘルンにいたします時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと、『本を見るいけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません』と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。

話が面白いとなると、いつも非常に真面目にあらたまるのでございます。顔の色が変りまして眼が鋭く恐ろしくなります。その様子の変り方がなかなかひどいのです。たとえばあの『骨董』の初めにある幽霊滝のお勝さんの話の時なども、私はいつものように話して参りますうちに顔の

色が青くなって眼をすえているのでございます。いつもこんなですけれども、私はこの時ふと恐ろしくなりました。私の話がすみますと、始めてほっと息をつきまして、大変面白いと申します。

『アラッ、血が』あれを何度もくりかえさせました。どんな風をしていったでしょう。その声はどんなでしょう。履物の音は何とあなたに響きますか。その夜はどんなでしたろう。私はこう思います、あなたはどうぞ、などと本に全くないことまでいろいろと相談いたします。二人の様子を外から見ましたら、全く発狂者のようでしたらうと思われま。

『怪談』の初めにある芳一の話は大層ヘルンの気に入った話でございます。なかなか苦心いたしまして、もとは短い物であったのをあんなにいたしました。『門を開け』と武士が呼ぶところでも『門を開け』では強味がないというので、いろいろ考えて『開門』といたしました。この『耳なし芳一』を書いています時のことでした。日が暮れてもランプをつけていません。私はふすまを開けないで次の間から、小さい声で、芳一芳一と呼んで見ました。『はい、私は盲目です、あなたはどなたでございませうか』と内からいって、それから黙っているのでございます。いつもこんな調子で、何か書いている時には、そのことばかりに夢中になっていました。またこの時分私は外出したおみやげに、盲法師の琵琶を弾じている博多人形を買って帰りまして、そっと知らぬ顔で机の上に置きますと、ヘルンはそれを見るとすぐ『やあ、芳一』と書いて、待っている人にも遇ったという風で大喜びでございました。それから書斎の竹藪で、夜、笹の葉ずれがサラサラといたしますと『あれ、平家が亡びて行きます』とか、風の音を聞いて『壇の浦の波の音です』と真面目に耳をすませています。

書斎で独りで大層喜んでおりますから、何かと思つて参ります。『あなた喜び下され、私今大変よきです』と子供のように飛び上って、喜こんでいるのでございます。何かよい思いつきとか考えが浮んだ時でございます。こんな時には私もついに引き込まれて一緒になって、何ということなしに嬉しくてならなかつたのでございました。

『あの話、あなた書きましたか』と以前話しました話のことを尋ねました時に『あの話、兄弟ありません。もう少し時待ってです。よき兄弟参りましょ。私の引出しに7年でさえも、よき物参りました』などと申していましたが、一つのことを書きますにも、長い間かかった物も、あるようでございます。

『骨董』のうちの『或る女の日記』の主人は、ただヘルンと私が知っているだけでございます。二人で秘密を守ると約束しました。それから、この人の墓に花や香を持って、二人で参詣いたしました。

『天の河』の話でも、ヘルンは泣きました。私も泣いて話し泣いて聞いて、書いたものでした。

『日本』では大層骨を折りました。『この書物は私を殺します』と申しました。『こんなに早く、こんなに大きな書物を書くことは容易ではありません。手伝う人もなしに、これだけのことをするのは、自分ながら恐ろしいことです』などと申しました云々と。

以上セツの話によってハーンが創作の時にどのような苦心を夫人と共にしたかを見て来たので

あるが彼は日本語を殆んど読めなかったがセツの話に出て来る様に日常生活に不便がない程度の会話の能力を持っていたし片仮名に若干の漢字を入れた文を書くことは出来たという話である。夫人が詳細に述べている様にハーンの怪奇談は殆ど全部が夫人の力で蒐集され彼に口頭で伝えられて数々の名品を生み出したのであるハーンの日本語の理解力の程度夫人の英会話の能力日本の古典についての鑑賞力は具体的には不明と言はざるを得ないが先に引用したセツの話にある通り何回も同じ話を繰返して話らせて理解した上で著作したのであるから夫妻の水も洩らさぬ緊密な協力を可能ならしめた彼等の能力については、果実を見てその木を知ることしよう。

ハーンの結婚問題についての考察

ハーンと小泉セツの結婚の時期については筆者が諸文献について調査した範囲では二通りあり一つは明治23年（ハーンが横浜に上陸した年）12月23日、もう一つは明治29年1月15日、である。最初の説は、ハーンが松江にいた時代であり、セツは上述の通り入婿との離婚後生活が困窮して住込み女中になっていたがハーンがその境遇に同情し女中として雇い入れたのである。兩人の間が深まるにつれて逐には北堀町の八雲旧居において同棲するようになったのであらうと思われる。この辺の事情は尚ほ綿密な調査を要するのであるが簡単に言うならばこの同棲を結婚と見ることになる訳であるが問題があると思われる。後の説は彼の入夫願いが正式に許可されて、天下晴れて日本人小泉八雲が誕生しセツとの間が法律上も結婚であり彼等夫婦にとって特筆すべき日なのである。筆者は、もちろん後者の日付をとりたいと思う。

前に紹介した明治24年6月28日（日）の山陰新聞の記事の後に引続き、「又たヘルン氏の妾は南田町稲垣某の養女にて、其実家は小泉某なるが、小泉方は追々打つぶれて母親は乞食と迄に至りしが、此の妾といふは至って孝心にて養父方へは勿論、実母へも己れの欲をそいで与ふる等の心体を賞して、ヘルン氏より15円の金を与へ、殿町に家を借り受け道具等をも与へ、爾来は米をも与ふることとなせりといふ。」と記されている。

同新聞の明治24年8月15日（土）

●ヘルン氏内の旅行

当尋常中学校雇教師ヘルン氏は、京坂地方（坂の字は原文のまま）漫遊として愛妾同道昨日出発したり。

以上のように、その地の、公器であり公平中立をモットーとする新聞でさえ妾と呼んでいるのであるから一般の人々がセツを、どんな眼で見えていたか推して知るべしである彼女はハーン夫人として当地の人々のコンセンサスを得られていないのである当時の言葉で言う“ラジャメン”であり当時の一般の人々からは白い眼で見られていたのではなからうか、それは当時の社会通念に従えば已むを得なかったのかも知れない。今日ならば内縁の夫妻というべきだろうが。当時は我が国に帰化法の法律制度がなかったので帰化の目的を達するには、日本人の養子になる

か、日本婦人の入籍になるか以外には何も法律手段はなかったのである。

先に筆者はハーンの人柄に触れて彼のやさしい愛情は小動物や植物にまでおよんだ、と書いた。一例をあげよう。懇意にしていた寺僧が大きな杉の木を三本切ったのを見て『何故、この木切りました』『今このお寺、少し貧乏です。金欲しいのであろうと思います』『あゝ何故私に申しません、少し金やる、むつかしくないです。私木切るより如何に喜ぶでした。この木幾年、この山に生きるでしたらう。小さいあの芽から』といて大へん失望し、『今あの坊さん、少し嫌いとなりました。坊さん、金ない、気の毒です。しかしママさん、この木もうもう可哀想なです』と言い『その後その僧とは疎遠になった』とセツは語っている。そのような人物が、最愛の同志が妾よばわりされているのに平然として居られるのは何故か、又セツの方でも誇り高く、家庭での躰も行き届いた、日本婦徳の体得者であり人々から笑い物にされるのを嫌悪した武士の家の娘として愛夫(おかしな言葉だが)の為とはいいいながら人知れず血の涙を流したであろう。何故兩人は一日も早く正式の夫婦にならないのであろうか。

ハーンはセツとの結婚に関して自分が日本国籍に帰化すればよいのであるがその為には前述の二つの方法以外にはない。日本人になれば給料が日本人並に下げられはしないかと心配している。その一例としてヘルンは『自分の友人で横浜に住む英国人が帰化したため給料を日本人並に下げられて困っていること』を述べ、『今しばらく時期を待って日本市民になりたいが妻セツや子供の利害も考慮しなければならず、セツからの希望もあって正式の妻として彼女を戸籍に入れようと何度も試みたが係りの者がいつも難しい事件だから東京で手続をする様に告げた。』と手紙に書いている。そのうちに明治26年11月に長男一雄が生まれるに及んで問題は複雑の度を加えた。その入籍の問題である。事態は今や徒らに時を過してはいられなくなった。

ハーンの前には次の問題が迅速な処置を促して横たわっている。

(1)ハーンが英国領事の前で結婚し、外務大臣の許可を得れば、妻セツ及び子供は英国人となり、日本における財産の所有権(註：外国人は当時の法律で日本の地所の所有を禁止されていて、外国人の妻となり、外国籍になる日本人女性は地所の所有は認められず、これを売却して処分するよう定められていた。)を失い、彼等はハーンの遺言状による以外には、いかなる財産も所有できないという英国の法律に規定される。しかし、この方法での財産相続制度は、親族相互の血で血を洗う修羅場を現出する結果になり易い。

(2)日本に帰化すれば、ハーンは前述の減俸の問題以外に、当然のことながら英国国家から保障されているすべての特権は自動的に失はれることになり、多額の税金をかけられた上息子(彼には一男、巖、清の三人がある。)を兵隊にとられることになる。(しかし、息子を日本市民にすることを望む)

これら二つの長短を十分に比較検討して(その決定までには前に名をあげた親友西田に彼の悩みを打ち明けてその教示を得たいと手紙を出している)日本人セツの入籍になる方法を選択したのであり日本人として新に生まれ出るに際して姓はもちろん小泉となるわけであるが八雲という

名は愛する日本の中でも彼が狂おしい程の愛を終生抱きつづけた(とは筆者の想像であるが)『八雲立つ出雲の国』から取ったもので雲の湧き出づる国の意味であると外国人(今や日本人として見た)の友に説明の書簡を送っている。"セツ妾説"については、当時の新聞もヘルンの心中を了解して報道したのではなかったのである。お二方の名誉のため紹介した次第である。

ハーンとセツの結婚生活は約13年間であり、セツは第二の夫には死別して再び寡婦となり、三男一女を育てるといふ重荷を彼女の双肩に負うことになったのである。今後ハーンに対する評価が高まるに従ってセツに対するそれも雁行して行くことであろう。そしてこの国際結婚で結ばれた異色の夫婦が一緒になって世に送り出した多くの著作や日常生活ぶりが、われわれに語りかけていることは次のことであろうと思う。西洋に追いつき追いこせと、その文化を取り入れることに、日も足らない有様であって、それが我が国の土壌でどのような花を開くか確かめる暇がなかった先人の後をうけて、現在に生きるわれわれは、ここらで一度立ち止って日本人が昔もっていた真の宝をもう一度探し出して現在の光にあてて見直しをすることが必要ではなからうかということを。である。

終りに臨み本学学長武藤六三郎博士より貴重なご助言をいただき、また絵葉書と写真を貸して下さったご親切に感謝致します。

この拙稿を終った今、筆者の胸中に去来するものは、卑見を弄して、^{ろう}鼻^{ひいき}の引き倒しをしてしまったのではないかという危惧の念である。在天の巨人ご夫妻のご寛恕をお願いするのみである。

ここに、お二方のみ^{たま}霊^{たま}に対し、深甚の敬慕と感謝の微衷を捧げ、謹んで、ご冥福を祈り奉る。 合 掌。